

平成 31 年 3 月 26 日

## ・若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880213  
氏名 西島 順子

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先 : 都市名 ヴェネツィア (国名 イタリア )
2. 研究課題名 (和文) : イタリアにおける民主的言語教育 : CEFR の複言語主義との比較と考察
3. 派遣期間 : 平成 30 年 10 月 2 日 ~ 平成 31 年 3 月 7 日 (157 日間)
4. 受入機関名・部局名 : ヴェネツィア カ・フォスカリ大学
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究は、現在、欧州評議会が言語教育の理念とする複言語主義と親和性があるとされる 1970 年代のイタリアにおける民主的言語教育の発生や理念、またその変遷を明らかにすることで、その言語教育の歴史的意義を解明するものである。派遣期間中に行った研究内容は主に以下の二点である。

#### 民主的言語教育提唱までのイタリアにおける言語教育政策

イタリア統一以降から 1970 年代までの言語教育政策とその言語状況の文献調査を進め、論文「(仮) 1970 年代までのイタリアにおける言語状況と言語政策の変遷」としてまとめた。日本では入手しがたい半世紀前の文献 (Pizzorusso, 1957, "Lingue (Uso delle)" など) から最新の文献 (Pizzoli, 2018, *La Politica linguistica in Italia*) まで、また希少な統計資料 (DOXA, 1974, *Bollettino della Doxa / Istituto per le ricerche statistiche e l'analisi dell'opinione pubblica italiana*,) も入手できたことで、民主的言語教育が提唱されるに至った当時のイタリアの言語状況を解明できた。

#### 民主的言語教育の言語教育実践

これまで明らかにされていなかった民主的言語教育の教育実践を、その提唱者である De Mauro の言説から見出し、その教育実践の萌芽から完成までの資料 (De Mauro, 1975, *Parlare in Italia*; De Mauro & Lodi, 1979, *Lingua e dialetti*; Gensini & Vedovelli, 1983, *Teoria e pratica del glotto-kit*) を入手することができた。それにより、当時の具体的な教授法や教師のための共通評価の枠組みが存在したことが明らかとなり、現在、それらの分析と検証を進めている。その教授法は当時最新の認知言語学や発達心理学などの理論が反映されていただけではなく、言語学者 Tullio De Mauro が構想した複言語教育の概念が内包されていたこと、また現代の複言語主義との共通性を有することを解明しているところである。

## 6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

### 研究成果発表等

上記の研究成果、論文「(仮) 1970 年代までのイタリアにおける言語状況と言語政策の変遷」に関しては、本年度の『日伊文化研究』に投稿し公表する予定で推敲を進めている。

民主的言語教育の実践に関する研究は、帰国直後の 3 月 9 日に言語文化教育研究学会の年次大会において「1970 年代のイタリアにおける複言語教育の実践—Glotto-kit (言語キット) に見られる複言語性とその狙い—」という題目ですべてに一部の発表を行った。また、現在検討中の部分については、6 月の言語政策学会において「1970 年代のイタリアにおける複言語教育の実践—言語学者トウツリオ・デ・マウロの構想した言語教育とその狙い—」という題目で発表予定である。一連の発表において得たフィードバックを研究に還元し、本年度中にまとめ、関連雑誌において投稿し、公表する予定である。

これら研究成果はすべて 2020 年に提出予定の博士論文の一部となる予定であり、提出後には書籍としての刊行を目指している。

### 今後の研究計画の方向性

滞在中、イタリア言語学会の分科会であり、民主的言語教育を提唱した GISCEL のメンバーと関係を構築し、研究に関する協力を得、意見交換ができたことから、新たな問題点も見えてきた。現在の多言語状況は移民言語との共存へと形を変え存在し、教育現場はそれと対峙し続けている。将来的には GISCEL メンバーとの共同研究も視野に入れ、過去の民主的言語教育の理念や経験を現代の言語教育の文脈へと関係づける研究へと向かいたい。

## 7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムから得られたことは数多くあるが、その中でも以下の二点を主にあげたい。

まず、現地におけるネットワークの形成である。GISCEL, Padova が行う研究会に定期的に参加し、民主的言語教育に携わってきた複数の研究者や 1970 年代に学校現場で教えていた教師たちと関係を築くことができた。また、民主的言語教育の実践となる glotto-kit を De Mauro とともに開発した Vedovelli 教授とも直接話す機会を得た。彼らとの対話により、文献からは読み取れない当時の教育現場の状況や、民主的言語教育の普及状況を理解することができた。加えて、自身の研究を発信し、彼らに認知してもらうことで、協力を得る環境を整えることもできた。これらネットワークは今後、研究を遂行する上で欠かせないものであると同時に、議論を深め、広げてゆく契機になるものであると考える。

次に、研究者像の再構築である。カ・オスカリ大学では受入教員だけではなく、その他教授や研究員、また様々な国から来訪する研究者たちに会う機会を得た。帰国前の 2 月 28 日には“Democratic language education in Italy in the ‘70s – Comparison and consideration of the plurilingualism of CEFR” という題目でこれまでの研究成果を発表し、分野を超えて、彼らから新たな観点や示唆を得ることができた。その機会に限らず、滞在期間中、グローバルに活動する彼らとの交流の中に身を置いたことで、自身の研究の国際的な位置づけや、今後の研究者としての在り方をも再考するきっかけとなった。

これら研究の進展と経験は、海外の大学において一定期間滞在しなければ得られなかつたものである。本プログラムに採用していただき、このような機会を頂けたことを、心から感謝している。